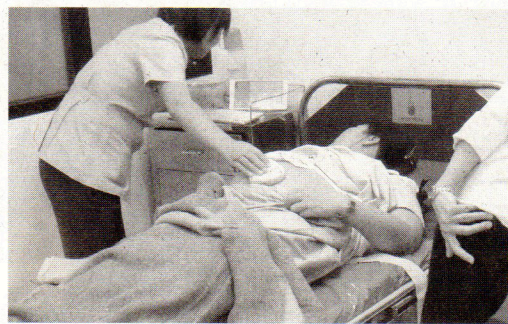


四国の売り方

第4部 世界に挑む⑤

離島の妊婦、遠隔健診

メロディ、円滑に情報共有



胎児のモニタリング結果は遠方の医療機関で確認できる

世界へ進出機会を狙う動きが加速

企業名	事業内容
メロディ・インターナショナル	胎児モニタリングに使う機器を製造。タイなど7カ国に進出する
かもめや	離島へのドローン物流の実証実験。国内で進む物流網の脆弱な東南アジアがターゲット
未来機械	太陽光パネルの清掃ロボット製造。中東地域に視野を入れる

課題解決、世界を視野に

メロディのように遠方の課題解決に着目したビジネスを、世界に展開しようとする企業はほかにもある。ニッチだが発想豊かに世界のニーズをうまくつかもうとしている。

かもめや(高松市)はドローン配送による物流事業を手掛けるスタートアップで、離島間や行き来が困難な場所での活躍が期待される。国内にある離島での実証実験を進

間をかけて納品後の運用をフォローしてきた。こうした施策が評価され、ガーナやミャンマー、ザンビアなどの医療機関に導入が決まった。特にブータンでは20年末、約50台の機器を納めた。医

療機関が日本に比べて少なく、医師の数も限られているため、直ちに処置が必要な妊婦の選別に活用されている。進出済みのタイでは緊急搬送時にメロディの機器が活用されたことをきっかけに、活用法に気付いて新機能を国内に「逆輸入」した。今後の課題は運用地域の機能強化に力を入れる方針だ。

離れている医師が状況に応じた適切な処置を素早く実施できるメリットがある。

メロディは2015年設立の香川大学発のスタートアップで、海外展開は17年のタイを皮切りに始めた。香川大の関係者がタイの大学と連携して、高止まりする周産期死亡率を下げられないかと医療施設に納品したのがきっかけだ。

機器の機能は納品先に合わせて柔軟に見直してきた。これまでメールで情報を通知する仕組みだったが、情報が多すぎて処理作業が煩雑になるといった課題が浮上した。そこで緊急性が高い内容などを選別できるフィルタリング機能を付け、必要情報により簡単に他の医療機関と共有できるような改良を加えた。

メロディは医療系の学会や代理店を通じ、海外の医療機関に導入を呼びかけている。各国の医療制度や慣習の違いがあることなどという。コロナ禍以前は必ず現地を訪れ、セミナーやデモンストラ

ーションなどを実施。時に

だ。尾形社長は「同種のサービスを提供する競合他社はおらず、実績を積み重ねて展開と提供数を増やしたい」と話す。足元では20年7月～21年3月までの決算が初めて黒字化するなど手応えを感じている。今後は様々な活用事例を集め、機器の機能強化に力を入れる方針だ。

ル向けの清掃ロボを製造する。砂をブラシではき飛ばすロボットで、手作業に比べてコストを大幅に圧縮できる。日本より日射量が多いアラブ首長国連邦(UAE)などを視野に入れ、太陽光発電の効率を下げないために、パネルの上に積もった砂漠の砂などを落とす。作業員が現場に行かなくても良くなるという利点がある。

「(亀井慶一)

瀬戸内海に面する香川県は数多くの離島を抱えている。離島などに住む妊婦の通院負担を減らすと、メロディが開発したのがIoT型胎児モニター「分娩監視装置iCTG」だ。胎児の心拍や陣痛が計測でき、遠方のタブレットで情報を確認できるため、簡単に異常の兆候を察知できる。

例えば、数多くの離島を抱える東南アジアの国

では距離が離れているという「物理的な課題」を解決できるほか、必要な医師を確保できない国では数を技術で補うといった「質的な課題」の解消が見込める。離島以外にも移動が困難で起伏がある山岳地域では、素早く状況把握・判断が可能なメロディの機器が活用される。

日経新聞 2021.06.22